

---

## 侍道 4 ~ とある兄妹の阿弥浜生活 ~

ソン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

侍道4 ～とある兄妹の阿弥浜生活～

### 【Nコード】

N5136S

### 【作者名】

ソン

### 【あらすじ】

幕府が外国と不平等条約を結んでから数年後…ある兄妹が阿弥浜を訪れる。

元侍で剣の腕は確かだが、何かとマイペースな兄。

元忍者でしっかりしているが、どこか抜けている妹。

二人が引き起こす物事に翻弄される阿弥浜の人々。

だけど、どこか楽しそうな、そんな物語。

外国勢力とかとゴタゴタの中、こんな平和な町があってもいいでし

よう？

最初は、原作通りですが途中から、真面目だったり、おふざけだったり、とにかくフリーダムです。

## 主人公設定

黒宮 飛燕 くろみや ひえん

19歳 男

元侍で今は、妹の杏奈と浪人生活をしている。かなりの気分屋でその態度は、相手が誰であろうと変わらない。

一応、ある程度の常識は知っている。

剣術の腕前は、かなりの物で、幕府から誘いがあつたが全て断っている（この事は、將軍と大老以外、誰にも知らされていない）

居合い、二刀流、素手、片手の4つに精通しているが基本的には、片手で戦う。

本気を出す場合は、居合い。

愛刀は、「獄焔」（ごくえん）と「残影」（ざんえい）

二つとも飛燕が作ったオリジナルである。

長い髪は、後ろに束ねており漆黒の髪に整った顔立ちをしている。

髪質は女性よりも美しい。

黒の着物をよく着ている。

攘夷戦争に参加していた事があり、一振りの刀で異国の大群を殲滅した事から「死神」と呼ばれていた。

ちなみに攘夷戦争の攘夷側生還者は彼を含めて3人だけである。

最近三姉妹から気に入られてるらしい。

黒宮 杏奈 くろみや あんな

17歳 女

元忍者。今は、兄の飛燕と浪人生活を送っている。しっかりしているがどこか抜けている少女。飛燕を兄と呼んでいる。

凄腕の忍者で、かつて暗闇脳天の頭領にいた。頭領時代にかかりの

支持があつたのか、暗闇脳天から手紙が毎日届いている。

忍者以外にも、拳銃にも精通しており、たまにいじくり回している。弾丸は自作。

飛燕と同様、小手調べには、忍者か拳銃、本気の場合は、忍者二刀流。

髪は、飛燕と同じ漆黒で、和風美人といえる顔立ち。

ショートヘアで、黒の着物に灰色の帯をしている。

愛刀は、「風魔」（ふうま）と「煉獄」（れんごく）

二つとも飛燕オリジナル。

飛燕が攘夷戦争に参加していたことは知らない。

二人ともかつて阿弥浜に住んでいた。

そのため色々な店の常連である。

## 始まり（前書き）

日本にある港町、阿弥浜  
その町に近づく船が一つ  
それに座るは二つの人影  
彼らの未来はどう変わる

## 始まり

阿弥浜へと近づくと、一つの船。その船に3人の人影が見える。

一人は、船頭だろう。三度傘を被り船を動かしている。

だが残る二人の人物は、船頭ではない。

男女だ。着ている着物は、二人とも黒であり女のほうは、灰色の帯をしている。

男は、釣りなどをしているが動いている船で魚がつれる事は稀だろう。呑気に口笛を吹いている。

女は、徐々に見え始めている阿弥浜をわくわくしながら見つめている。

「なあ、お二人さんよ」

「ん？」

「ん？」

二人が同時に船頭を見る。なるほど、この息の合い方は、確かに兄妹だ。

「阿弥浜は久しぶりかい？」

男のほうは、釣竿をしまつて、船頭の方を向いた。長く後ろに束ねてある髪は、女性より美しい。

「ああ、10年ぶりです。阿弥浜を離れる時、コイツが物凄く泣いてたのは今でも覚えてます」

男がそういいながら笑うと女は、少しムキになった様子だった。

「兄さんだって泣いていたじゃない」

「あれは、お前のパンチが異常に痛かったんだよ。泣いてる妹の殴打で殺されかけるなんて後世までの笑い話だ」

「私、そんなに強く殴ってないよ？」

「俺に、そんなの基準を教えてください」

思わず笑い出してしまう。

いつの間にか二人も笑っていた。

そうしている内に岸へと着いていた。

「そっいいや、お二人の名前は？」

男は、棧橋に足をかけながら振り向く。

「ああ、俺は、黒宮飛燕！そして、コイツが泣き虫の……」

「泣き虫じゃなくて、飛燕の妹の杏奈です！」

「……そうだったけ？」

「兄さん！」

そうして二人は、棧橋を上がり阿弥浜に上陸した。

「子が巣立っていくってこんな感じかねえ……」



船頭は、思わず苦笑いした。  
そして祈る。  
彼らが幸せになれるように。

飛燕は、人だかりを見つけ覗き見る。

人が集まって出来た輪の中に、役人とライフルを持った海兵隊の姿が見える。

「警備体制がしかれてるな。多分外国のお偉いさんと話し合ってるんだろう」

「何か襲撃してくる可能性があるね……」

「？」

「攘夷だよ。攘夷運動。正式には、尊皇攘夷。天皇を敬い外国を排除せよっていう事」

飛燕の脳裏にある記憶が蘇ってくる。

飛び交う悲鳴、絶叫。

それらを見無視して目の前の敵をひたすら切り倒し続けていた時を。自分の支えになる仲間を姿を。

飛燕は頭を振ってその記憶を追い出す。

「排除ねえ……どうして誰もかも自分勝手なんだろうな」

近頃、辻斬りや人殺し、攘夷による異国人襲撃、そういった事件が日本各地でおきている。

それを聞くたびにいつもうんざりするのだ。

目の前のいる者を斬って何が変わるのだろうと。

自分より高いものを学ぶべき

自分より低いものを導くべき

この二つが二人が自分なりに見つけた侍の道だった。

そこにたどり着くまでどれほどの屍を作ってきたのだろう。

どれほどの時間を無駄にしてきたのだろう。

心が闇に飲まれそうになる。

いるものだ。自分の信念を尋ねられると必ず歴史の偉人の言葉を言う者が。

それは模倣ではないのか。

模倣を信念といえるのか。

その問いに答えはないだろう。

考えれば考えるほど、人間は訳が分からなくなる。

「火薬の匂い……っ！伏せて！」

杏奈が叫ぶと同時に飛燕は、そばにあった樽を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた樽に大砲の弾が直撃し、火薬と木の燃える匂いが鼻に突いた。

飛燕は、片手で残影を抜き、大砲の弾が飛んできた方向に構える。

敵がいると悟ったのか杏奈は、風魔を抜いて屋根へ駆け上がる。

「とんだ邪魔が入ったな」

男が大砲と共に出てくる。後ろから赤城と叫ぶ声が聞こえた。

背中に帯刀していて、その刀の柄は白い。

「……攘夷か」

男は、飛燕の顔を見つめる。

「お前も幕府の犬か？それにしても、歳が若い」

「ただの浪人だ。阿弥浜生まれのな」

「あなたのその目……他のヤツらとは違うな……。侍の目だ」

後ろから来た役人が赤城へと斬りかかる。

だが、突然入ってきた男に斬り捨てられる。

男の使っている剣術は居合い。

「小暮、ひとまず様子を見るぞ」

「……分かった」

飛燕の周りを、攘夷らしき男たちが囲んでいた。

頭に巻いている布に書かれていた文字は、般若党。

「来いよ。遊んでやる」

屋根の上から何かを斬る音が聞こえた。

杏奈の読みは、当たっていたのだろう。元忍者だけに、行動力が早い。

無論、彼女が負ける事はありません。

長年、共にいたのだから。

周りにいるのは、ざっと8人。

飛燕は、まず一人目の男を斬る。男は、いつ斬られたのか分からなかったように目を見開いていた。

二人目と三人目は、同時に斬り捨て、四人目も斬る。

四人目が斬られて初めて男たちは、斬られていると分かり応戦する。だが、気づくのが遅すぎた。すでに八人目まで斬られていた。結局、飛燕を囲んだ般若党の男たちは、一度も剣を振るう事が出来ないまま、地面に倒れた。

飛燕は、血を払い周りを見渡す。

赤城と小暮が消えている。

「まさか……」

少女の悲鳴が聞こえた。

赤城が少女の腕を掴んでいる。

少女が、何か外国の大使なら下手に動く事は出来ない。

普通ならな

飛燕は、すぐに走り出す。

数人、邪魔してきた者がいたが全て斬り捨てる。

「毛唐の女を助けるつもりか？」

「どうでもいい。さっさと手を離せ」

突然、赤城の腕から血が出る。

クナイが刺さっていた。

飛燕は、赤城を蹴り飛ばして少女を自分のほうへと引き寄せ、彼女を庇うように刀を構えた。

小暮が赤城の傍により肩を貸す。

「赤城！」

「くっ…忍者か」

隣に杏奈がいた。彼女が着ている着物には、返り血一つ着いていない。

彼女の後ろには、般若党達の死体が多くあった。

「殺傷力はないよ。血は出ても、打ち身程度だから」

「あんた達、幕府の犬じゃないな」

「当たり前だ」

「……あんた達、この国の今をどう思っている？もし憂う気があるならその腕を……」

「ジョーイ！覚悟！」

「観念しろ！」

振り向くと、金髪の甲冑に身を包んだ女性騎士と代官の服を来た男がいた。

事前に聞いていた人物だった。

メリンダ・デカメロンと琴吹光だったはずだ。

少女は、赤城の血を見たときのショックか気絶していた。仕方ないかもしれない。

この少女が剣や槍の中に身を置くには、心身ともに早すぎる。ただ、弁明はしてもらえなさそうだ。

「杏奈、何か輝いている奴を頼む。俺は関取をやる」

「誰が関取だ！」

どう考えてもその体は、相撲向けだろう。

杏奈は、風魔を構えメリンダと対峙する。

代官の服を着ている事から剣の腕も確かなはずだ。少し気持ちが高ぶる。

「いくぞ、小結！」

「だから相撲取りではない！」

飛燕は琴吹の刀を受け止める。

「最近の代官って、一般人に対しても刀を抜くのか？」

「貴様らは一般人ではない。人の命を弄ぶ不当な輩だ！」

おそらく攘夷のことを言っているのだろう。

飛燕は苦笑する。

かつて自分も攘夷に参加していたのだから。

とは言ってもここで易々と斬られるつもりはない。

「おらぁ！」

後ろから役人が斬りかかろうとした。

飛燕は、片方の手で差してある刀を抜いて役人の腹を刺す。

「水泳でもしてる！」

指した刀を引き抜くように蹴飛ばし、役人を海に落とす。

「ぬっ！よくも！」

琴吹が怒りに燃え始める。

仕方ないか。

飛燕は再び迫ってきた琴吹の刀を素早く横に移動して避ける。

飛燕の姿が残像となり刀を振る構えへと切り替えた。

「しまった！」

琴吹は目を閉じる。

だが斬られた感じはしなかった。

手元を見ると刀の柄から先が消えていた。

いや、刃の部分を切り落とされたのだ。

「はい、終わりっ」と

飛燕は刀を鞘に収める。

視線を向けると杏奈が金色の鎧を着た女性の頭部に蹴りを入れて気絶させていた。

杏奈は風魔を構えた。

諸刃の剣を構えているのが6人、隊長の女性が1人、ライフルを持っている兵士が3人いた。

何だ。雑兵ばかりじゃない。

「こんなか弱そうな女性が攘夷に参加するとは……日本は恐ろしいな」

カチンと何かが切れる音がした。

馬鹿にされた気分が心の中に広がっていく。

周りから美人やべっぴんさんと言われたことは何度かある（そのたび恥ずかしかったが）。

だがか弱いと呼ばれたことは一度もない。

「それじゃあこっちから行く！」

ライフルを持った海兵隊たちが一度宙を舞ってどさりと地面に落ちる。

「なっ！」

「峰打ちから殺してないよ。だけどまだ遊んでくれるよね？」

杏奈がにっこりと微笑む。

5人の騎士が何を考えたのか杏奈に向けて突進した。だがその騎士達もつかの間にか斬られ地面に倒れる。

「クソッ！」

騎士が海兵隊が持っていたライフルを取って撃つとする。が、その体を銃弾が貫いた。



「銃を使えるのが自分たちだけでも思った？」

杏奈が拳銃を構えてやはり笑っていた。

そして拳銃をしまつと同時にメリンダに斬りかかる。

「くっ！」

受け止めるが、手がしびれるほどの反動が来た。

そしてメリンダが見たのは、横から迫ってくる杏奈の足だった。

「そつちも終わったか」

「兄さんこそ、てこずってたみたいね？」

「お前は拳銃があるから有利だろ」

杏奈はクスリと笑う。

その笑みは年相応の笑みだった。

「お前たち！」

声が出たほうを向くと赤城と小暮がいた。

「その力、日本のために使わないか？お前たちがいたならそれは日本を救う刃となるはずだ！」

それに琴吹が割り込んでくる。

「騙されてはいかん。コイツらは悪者だ。その刀は正義を守るためにあるべきだ」

「俺たちは神社にいる。用があつたら来てくれ。歓迎するぞ！」

そう呟くとともに赤城と小暮はどこかへと走り去っていった。

「あいつらめ……すまなかった。拙者勘違いをしていた。用があるならぜひとも代官所に来てくれ。盛大にもてなそう！」

そういつと琴吹は先ほどの二人を追っていった。

「助けていただいております。私の部下が無礼を働き申し訳ありませんでした」

また声がしたので振り向くと赤城から助けた少女がいた。

「あの……ぜひよければ領事館に来ませんか？もつと日本の文化を知りたいのです。よろしく願います」

そういうと少女 確かローラ・リータだった は、目覚めたメリンダと伯爵らしき男と共にどこかへと向かっていった。

「兄さんどうする？」

「そうだな……空き家でも借りるか」

昔、顔馴染みだった寿司屋の店主に二階を貸してもらえることにな

った。

だが借りた恩は、返さないといけない。

「……店、開くか」

「店？」

「何でも屋かなあ」

「万事屋？」

「ああ、阿弥浜ってさ困ってる人多いだろう。だから、その人たちを手伝うんだよ」

「……いいかもね」

こうして、阿弥浜の港には、ある店が誕生した。

寿司屋二階にある、万事屋。

その店には、しばらく代官所と般若党と領事館の訪問が止まなかったらしい。

## 始まり（後書き）

はい。やっちまいました。ソンです。

原作通りは、これまでですね。

次から思いつきフリーダムで行きます。

それでは、これからもよろしくお願いします！

誤字脱字あったら報告ください（ボソッ

## 拷問のススメ(前書き)

拷問とは快樂である

快樂とは拷問である

一度囚われたなら抜け出せない

## 拷問のススメ

万事屋を開いてから数日後、阿弥浜の住人の依頼をこなしながら二人は、何とか生計を立てることが出来た。

住人からの依頼には、奇妙なことに「下着を探して欲しい」「ネコの世話をして欲しい」「10匹くらいの釣果がほしい」など不思議な物もあった。

だが生活するために、贅沢はいえない。万事屋の大家でもある寿司屋の店主に売れ残った寿司を分けてもらったり家賃を無料にしてくれたり、商人には、特別に品を半額で売ってもらったりと近隣住民からかなりの待遇をしてもらっているため、いつか恩は返さねばならない。だからこそ出来ることは今のうちにやっておくのだ。

飛燕は、障子の隙間から入り込んでいた手紙を読んでいた。まだ朝なので外では鳥のさえずりが聞こえる。

杏奈の名前が書いてあることから、暗闇脳天と呼ばれる隠密集団からだろう。

彼女が頭領であった時代、暗闇脳天はかなり優秀であったらしい。だから杏奈が組織を抜けた後でも彼女への恩を返そうと暗闇脳天が阿弥浜各地の情報を送ってきてくれている。

ちなみにその情報は、かなり詳細に書かれており生活には、かなりの大助けとなっていた。

「街道の辻斬りを指名手配……確かに金額はいいな……団子屋の商品が現在安くなっている……団子かぁ……呉服屋、手伝い募集……道場、先生探してます……求む、鍛冶屋後継ぎ……」

「兄さん、いいのあった？」

杏奈が障子を開けて入ってくる。朝の町を周り情報を集めていたの

だろう。

「ああ、本当に暗闇脳天は助かる。じゃあ今日は……」

「黒宮飛燕はいるかい？」

外から声が聞こえた。

杏奈が抜刀しようとするが大丈夫だと言って障子をあげた。

「あんたが黒宮飛燕？」

「そうだけど……」

外にいたのは、肌色の帽子を被った男だった。ボサボサの髪は隠せてはいないがどこか気楽そうな感じがする。

「俺は、運上所頭取の茂呂茂。早速だが代官所にきてほしいんだ」

「代官所？悪いことをした覚えはないぞ？」

茂呂は、軽く笑う。

「大丈夫だって。依頼だからさ」

「依頼？」

代官所からの依頼というのは、何か嫌な予感がする。内容的な意味でだ。

だが代官所からなら報酬もいいかもしれない。

二人は、考えた挙句受けることにした。

「……で依頼っていうのは？」

代官所にいくと二階らしき場所に招待され目の前に料理が並べられる。

目の前には、大老の姫君である三姉妹が座っていた。

「依頼といつてもそんなに對した事じゃありませんわ」

長女の万由が何を考えているのか分からない表情で微笑む。

ちなみに目の前に並べられている料理は鍋だ。確か阿弥浜海鮮鍋でかなりの高級料理だったはずである。

文字通り阿弥浜の海の幸を鍋で煮た簡単な料理であるがかなりの美味でこの鍋を食べるためだけに阿弥浜に来る者もいるという。

「まあ、とりあえず食べて話そうよ。ねえ？」

次女の千佳が男勝りな表情で尋ねてくる。

なるほど。依頼の内容がちよっと酷いから鍋を食べたらそれを理由に精神的に追い詰めて無理やりにでも受けさせる気ね。食べたらダメ。もちろん分かってるよね。兄さ……

杏奈の期待は、ボロボロに崩れ去った。

飛燕は、鍋をひたすら食べていた。しかも汁一滴こぼさず全てを平らげようとしている。

「やっぱ鍋はうまいな！ん？どうした杏奈？食べないなら俺がもらっぞっ。」



「……………何でもない」

杏奈は、ため息をついてから鍋に箸を着けた。  
やっぱり海鮮鍋は、美味しかった。

「ご馳走様でしたっ」と

「……………ご馳走様でした」

二人の目の前に置かれていた空の器が回収され机がどこかへと運ばれていく。

「それで依頼なんですけど……………少し来ていただけます？」

そうして連れて来られたのは、三姉妹が拷問塔と呼ぶ所だった。

「1111は……………」

牢屋の中に罪人がいるがそれぞれの態度は全然違った。

まず三姉妹の名前を叫ぶ者、うなだれている者、そして動かない者

「あなた方に受けていたただきたいのは、私たちが行っている拷問をもう少し強くしてほしいのです」

「もう少し強く？」

「簡単なことさ。死なない程度に、そして簡単に苦痛を味わせる事

ができるようにしてほしいってことだよ」

二人は、目の前で行われている人間水車と呼ばれている拷問器具を見る。

「簡単に痛み……」

「琴吹さんのふんどしを常時顔に近づ「却下」……だよね」

「そうだなあ……今思いついた方法なら」

早速と拷問者が人間水車に磔にされる。だが水は、入っていない。

「ちょっと逆さにしてもらえるか？」

「分かったですよ」

拷問者の体が地面と逆の方向を向く。これだけでも十分拷問だが……。  
飛燕は、道具袋から液体の入ったビンを取り出す。

「何するの？」

「俺たちが子どもの頃、海とかよく遊びにいったてさ。調子乗って顔から海に突っ込んだら水が鼻に入ってきて……アレは死ぬかと思つた」

「……ああー、そういう事ね」

杏奈だけが手をポンと鳴らし三姉妹は、訳が分からないという顔を

している。

「そいつをどうするんだい？」

「見ればわかるさ」

飛燕は、その液体を拷問者の鼻へ流し込む。  
途端に拷問者は、体を激しく揺らす。

「痛い痛い！！やめてくれだ、あつ！やめて！痛い痛い痛い！ごめんなさい！僕がやりました！下着は僕が盗みました！ごめんなさい！許してください！！」

「な？」

飛燕は、その液体を飲んでいる。

「ソーダ水…確かにそれはキツイかもね」

「どうして鼻に水を流し込んだら痛いのです？」

「分からん。……うん、やっぱソーダはうまい」

飛燕は、一息つくくとビンを道具袋の中にしまう。

鼻にソーダ水を流し込む。確かに激痛ですぐに根を上げるかもしれないが外国からの物を使うため、三姉妹としてはあまり使いたくないさそうだった。

「じゃあ次は、私の番だね……私は……」

杏奈が手にしているのは、電撃棒。

飛燕が暇つぶしに作った武器の一つだ。（異国では、スタンロッドというらしい）

杏奈は、それを構えて縛られている拷問者の横に立つ。

その姿は、一言でいうなら悪魔だった。

無邪気な子どものようにワクワクしながらその奥には、ドス黒い何かが見える。

「それじゃあ行くよ。ほら！」

杏奈が電撃棒を拷問者の体に叩き付けると同時に電撃が走りその体を苦痛へと誘う。

拷問者は、悲鳴を上げていない否悲鳴を上げるのを忘れていたのだろう。

「どう、もっと感じたい？」

杏奈が耳元で囁きかける。

「は、はい！もっと、もっとお願いします！」

「ふふっ、身も心も正直だねー、そら！」

飛燕は、ため息をつく。妹がこんな性癖を持っているのは知っていたがここまで酷いとは、思わなかった。

ちなみにその拷問は、杏奈の気が済むまで続いた。

「電撃棒……なんと恐ろしい……」

万由が口元に手を当てて珍しく驚いた表情をしている。  
恐ろしいのは、あんたらの性格だよ。

「これは、どこで売ってるんだい!？」

千佳が興奮を抑えきれない感じで杏奈に尋ねる。

「この電撃棒は、兄の自作でして……」

「殿方が？」

「ああ、武器作りは俺の趣味の一つだからな。コイツらも俺が作ったんだ」

飛燕は、腰に差している二つの刀を指差す。

「分かりました。この電撃棒をこれからの拷問として利用させていただきます。ところで報酬は？」

「金で」

「金でお願いします」

二人の即答に三姉妹は、どこか残念な様子だった。

「なあ、杏奈」

「どうしたの、兄さん？」

「俺、何かとんでもないことした気がする……」

「……私もそう思う」

次の日、阿弥浜には、電撃棒の痛みを覚えてしまい役人を蹴る住人が続出したという……。

その後万事屋の郵便に三姉妹からお礼の手紙が来たとか来てないとか……。

## 拷問のススメ(後書き)

はい。フリーダム編一発目です。

何かスベった感満載ですが気にしない！

オリキャラ出そうかなと考えています。(オリ主じゃないかなんて  
言わないで！)

記憶継承している侍ですかね。

E D 攘夷の炎からこちらに来たとか、茂呂とともにからとか、外国  
雄飛とか……フリーダムって幸せ

誤字脱字あったらお願いします。

葛藤 ・ 深い闇の中で ・ (前書き)

過去から目を逸らすな

自身と向き合え

答えなんてない

答えが無い問題など存在しない



葛藤 - 深い闇の中で -

「釣れねえなあ……………」

早朝の太陽が昇る港町。飛燕は釣りをしていた。長い間待っているがちっとも手ごたえがない。釣った魚を入れておく壺には、空っぽであり物寂しげに見える。

「うーん……………何故だ……………」

杏奈は、川で釣りをしており別行動を取っている。間違いなく杏奈のほう釣れているはずだ。

先ほど、魚が何十匹も入った壺を持って万事屋に入っていく、新しいものをつけて川の方へ向かったからだ。さきほどからその繰り返しである。

「……………はあ」

物思いにふけていると釣竿から手ごたえが来る。しかも、中々強い。

「おっ、来た来た！」

竿を勢いよく振り上げる。その竿の先には、巨大な魚が掛かっていた……………はずだった。

「……………マジかよ」

竿についていたのは、長靴。おそらく異人が捨てたものだろう。阿

弥浜の海にゴミを捨てるなど考えられない。  
そして合わせが中々強かっただけに落胆も大きかった。

「……はあー」

また杏奈にどやされるのだろう、と考えながら竿をしまつ。

「あの……すみません」

「何だ？」

声が出た方を向くとそこにいたのは、少年だった。  
大人びている雰囲気だがどこか幼い。

そしてその瞳の奥の憎悪が微かに見えた。  
だがその憎悪は、自分に向けられていない。  
そしてその感情に飛燕は、見覚えがあった。

雨が降りしきる。

地面に倒れているのは、自分の両親。

二人を中心にして赤い血溜まりが広がっている。  
降り続く雨がその血を流していく。

それを見つめている自分。そして自分の妹へ今にも振り下ろされそ  
うな刀。

無我夢中だった。父が持っていた刀を抜いてがむしゃらに突っ込ん  
だ。

気がつけば叫んでいた。

目の前には、自分の両親を殺した辻斬りが倒れていて  
右手には、鮮血がべったりとついた刀が握られていて

妹がそれを唾然としながら見つめていた。  
集まってくる同心や役人、周りに人だかりが出来ていた。

最近、多いよな辻斬り。

何でだ。何でお前らは、そんなに冷静なんだ

世の中物騒だな。夜道も歩けやしねえ。

何でそんなに他人事なんだ。目の前で人が斬られたんだぞ。

あの子達、兄妹よ…可哀そうに。これからどうするのかしら。

何故だ。どうして人が死んでいるのをおもしろそうに眺めているんだ。

何で人は気づかないんだ

明日必ず生きている理由なんてないのに

ヒトハ イツカ シヌ ノニ

目の前の少年を見る。似ていた。あの頃の自分と。

「万事屋さんですよね……お願いがあるんですけど……」

「……分かった。用件を聞こう」

飛燕は、少年を連れて万事屋へ入った。

杏奈が部屋に戻っていて釣果を確認していた。

「あつ。兄さん、お帰り」

「杏奈、客だ。用件を聞こう」

飛燕の変化に気がついた杏奈は、真剣な表情になると魚を壺にしまつて椅子に座った。  
少年も椅子に座る。

「それで、用件は何だ？」

「ある人を……殺して欲しいんです」

途端に飛燕の目が細まる。

「ある人って？」

「……運上所頭取の……茂呂茂です」

「理由は？」

「あいつは……俺の両親を殺したんです。なのにあいつはひょうひょうとして！俺の両親を殺した事を反省すらせずに！ただ生きてい

るんです……それ憎くて……」

「……殺したという証拠はあるのか」

「この刀に……両親の血がついていたんです。それで刀の持ち主を聞いたら茂呂茂という人物だった……」

出された刀は、普通の中流刀だった。

何かおかしい。

茂呂がもっていたのは、ハルユキという青色の鞘が特徴的な刀だったはずだ。

それに茂呂自身あまり刀を帯刀していない。

夕張流体術という素手で戦うはずだ。

しかも茂呂は、厄介事は嫌うはず……人をわざわざ殺す理由がない。

「誰に聞いたんだ？」

「般若党の人です」

「……特徴は？」

「赤い布を頭に巻いています」

赤城や小暮ではない。

茂呂が般若党から嫌われていることは、知っている。

だが何も知らない少年を利用するという非道的な事はしないはずだ。まず赤城が許さない。

もし般若党の中に少年の両親を殺した犯人がいて、茂呂を暗殺する

つもりなら事態は悪化していく。  
下手すれば赤城や小暮、代官所の面々も暗殺されるだろう。

「少年、名前は？」

「え、紀野原京です」

「紀野原、おそらくお前は騙されてる」

「騙されてる？」

「茂呂は、間違っても辻斬りなんて真似はしない。例え誰の命令でもな」

「どういつ……. ことですか」

「俺たちは、君の両親を殺した犯人を見つけ出す。君はしばらく俺たちが保護する……. まあ、ずっと家の中にいる」

紀野原は、突然椅子から立ち上がる。

「嫌です！俺にも協力させてください！俺の両親を殺した本当の犯人がいるなら……. 俺はそいつを殺します！」

「駄目だ。危険すぎる。お前は事態が収束するまでコイツにかくまってもらえ」

杏奈に視線をちらりとやる。杏奈は、うなずくと外に出てどこかへと向かった。

「俺にも協力させてください！俺は、俺は両親の仇を」

「いい加減にしろ！」

「！」

飛燕は、一括すると腰から獄焔を抜いて机の上に置く。

「お前は手を出すな。わざわざ人の命を背負う必要はない。どうしても我慢できないならこの刀で自刃しろ。そうすればあの世で両親から真犯人を聞ける」

「っ！」

紀野原は、悔しそうに唇を噛む。  
わなわなと震えていた。

「少し独り言を呟く。黙って聞いている」

「……」

この阿弥浜には、ある家族がいた。

その家族はいつも楽しそうに笑っていて誰が見ても幸せそうだった。楽しそうに話をしている父、微笑みながら聞いている母、そして無邪気に笑いながら話を聞いている兄妹。

もしその家族が生きていたなら間違いなく阿弥浜一幸せな家族だった。

ただどある日、その幸せは突然消えた。

まず最初に母が斬られた。

辻斬りに襲われたんだ。

次に父が斬られた。

妻が斬られた事に激昂したのか辻斬りに素手で掴みかかりその時に腹を貫かれた。

父と母は、互いに重なるようになって死んでいった。

次に辻斬りは、おびえている妹に斬りかかろうとした。

だがその時、叫びながら突進してくる兄に斬られ、そのまま死んだ。その日を境に兄妹の暮らしは激変した。

当たり前だった日常が突然終わりを遂げた。

いつもあっていた家は、いつのまにか壊されていて、周囲の人々はその兄妹を避けるようになった。

そりゃそうだ。人を殺した子どもなんだからな。

唯一、普通に接してくれたのは、両親が生きていた頃にいつも行っていた常連の店の店主だけだった。

やがて兄と妹は阿弥浜を離れた。その二人を行方を知る者はいない。

「……………」

紀野原は黙って話を聞いていた。

「俺が親なら我が子の未来潰してまで仇をとってほしいなんて思わないけどな」

「……………」

「じゃあ町に出かけてくる。飯は、大家の寿司屋の店主にタダで食えるように話をつけておくから好きな時に下に行って食え」



「……」

「おとなしくしてろよ。間違っても仇をとろうなんて思っな」

そういつて飛燕は、障子を閉めた。

紀野原は、机の上に置かれている刀を手取る。

これが重み……人の命を奪う重み……

少年は、刀を置くとうずくまる。

今の少年は、無力感と絶望感の境界に挟まれた一人ぼっち。

誰もいない。

無だ。

深い闇に飲み込まれていくようだった。

こんな事しかできないのだろうか。

激しい衝動に駆られ泣き出したくなる。

もし、飛燕が呟いていたことが彼自身のことならば

彼はどれだけ深い闇に囚われていたのだろうか

そしてその妹はどれだけ怖かったのだろうか

その問いに答えるものはない。

今この場所には、少年しかいないのだから。

葛藤 ・深い闇の中で ・（後書き）

続きます。

誤字脱字報告あったらよろしくお願いします。

鉛色 ・空虚への咆哮 ・(前書き)

理性を潰すな

己を疑え

誰も信じるな

全てを決めるのは自分自身だ

鉛色 - 空虚への咆哮 -

「おい、飛燕いるかぁー？」

突然間の抜けたような声が響き万事屋の障子が開く。

紀野原は、刀を隠して姿を出す。

そこにいたのは、肌色の帽子を被り何を考えているのか分からないひょうひょうとした感じの男。

コイツが……茂呂茂！

「ん？お前さんは……あいつらの弟子か？」

紀野原はすぐに刀を抜いて茂呂に突進する。

刀の刃は、茂呂の腹を貫いた……少年はそう思っていた。

しかし、茂呂は紀野原の動きに素早く反応し地面に組み伏せる。

「あつぶねえー、近頃の子どもは、こんな物騒なモンで遊ぶのかい？」

「黙れ！人を殺したくせに何だよ！その態度は！」

その時、茂呂の目がすうと細まる。まるで何かを見据えているようだ。

「……じゃあ、俺が死んで何かが変わるのかい？」

「え？」

「お前は自分の両親を殺した俺を殺した。それで何か変わるか？何も変わらない。世界はずっとそのままさ」

「……だから俺の両親を殺したっていうのか？」

「おい、何の事だが知らないが俺は人を殺した事なんてないぞ？第一、刀なんて持ち歩かないからな」

茂呂は、ほれと自分の両手を上げて腰の部分に視線をやる。

「あーそうそう。外国の刀っていうのはな……」

勝てない

自分と違いすぎる。器も力量も。

気がつけば茂呂の外国話を真剣に聞いている自分がいた。

「ここだよな……」

飛燕は、墓場を見渡していた。

住人から聞き込みをしていた結果、一番最近の辻斬り事件の現場は、墓場だった事が分かったのだ。

墓標などに血が染み付いていた。

その前には、人の血を浴びて所々赤く染まったおにぎりが置いてあった。

触ってみるとまだほのかに温かい。だが人の心を和ませる物ではない。

むしろ空虚感を強くするぬくもり。

「…………許さねえ」

自然と拳を握り締めた。

それと同時に感じる殺気。

とっさに獄焔を抜いて後ろから来た刀を止める。

そこにいたのは、編み笠を被った謎の男。

般若党の服装をしていた。

「何の真似だ？」

「いやあ…………血に飢える獣の声が聞こえてね…………ほらあ、聞こえたよ」

再び振りかざされる刀。

だがこの男は、飛燕に無防備な所を見せてしまった。それが運のツキだ。

普通の人だったおびえてそのまま斬られていただろう。

飛燕は違う。数々の修羅場をくぐり抜けてきた。

すぐに男の胸目掛けて切り裂いて返す手で鞘に戻す。

「悪いが獣は嫌いなんでね」

獄焔を完全に納めると共に男が崩れ落ちた。

気がつけば周りを先ほどの男と似たような者達が囲んでいる。数十人はいるだろう。

100人はさらに越えるかもしれない。

「いいねえ…………少しは楽しめそうだ」

逃げる事も隠れる事も出来ない。  
ただ戦うしかない。

刀という死が迫り来る中を潜り抜け全てを叩き斬るしかない。  
飛燕は不適に笑うとその大軍に向かって突っ込んでいった。

「……うん、ありがとう。やっぱり情報が早くて助かる」

杏奈は、まだらから渡された巻物を見ていた。

お面を付けた忍者、まだら。

彼女は、杏奈が頭領の時代に彼女の右腕として活躍した。

まだらもまた、杏奈に大きな恩があるのだろう。

片膝をついて頭を伏せている。

調査を頼んでいたのだがその結果はすぐに返ってきた。

分かった事は2つ。

まず般若党内に何か別の内部組織ができ始めている事。

そしてその内部組織はずっと前から辻斬りを繰り返しているという事。

「頭領。何があればすぐにお呼びください。直ちに駆けつけます」

「もう頭領じゃないし敬語じゃなくていいよ。次に調べてほしい事は……っ！」

すぐ近くで飛燕の咆哮が聞こえた気がした。

でもここは、屋根の上なのだ。

後ろを向いてが見えるのは、家々の屋根と曇り始めている空だけだった。



「頭領、大丈夫ですか？」

「大丈夫。まだら、何人か般若党に潜入させて情報を探つて。出来るだけ早くお願い」

「分かりました」

まだらは、屋根から下りるとどこかへ走り去っていった。  
杏奈は空を見つめる。

「……本当に大丈夫だよな？兄さん……」

少女の叫びは、鉛色の空へと吸い込まれていく。  
そしてそれに答えるかのように雨が降り始めた。

「雨……あ、巻物が濡れちゃう！」

杏奈は急いで巻物をしまつて万事屋へと向かった。  
そして確かに飛燕の咆哮を聞いた。

「ちょっと遊びすぎたか……」

飛燕は、その場に座り込み周りを見る。  
すでに彼の周りには屍の山が出来上がった。  
彼の長髪には鮮血が滴っており着ている着物を赤く染めている。

「……嫌な天気だ」

鉛色の空は雨を降らす。

それはまるで空が何かを訴えているようだった。

腹の中からこみ上げてくる何かを感じ飛燕は立ち上がった。獄焔の血を払うと鞆に収める。

前へ進もうとすると足が重い。

重石をつけられているかのように重く意識が朦朧としてきた。

おいおい……俺は一太刀も受けてないぞ。

体が重い。

考えがまとまらなくなってきた。

だがそれでも行かなければならない。

自分が帰るべき所へ。

そつだ。紀野原が待っている。残月を回収しなくちゃな。

杏奈。怒るかなあ……。そりゃそうか。服汚しちまったもんな。

怒られるに決まってるさ。

笑おうとするが息が出ずに詰まり咽る。せきを手で押さえるとそこに赤い血がついていた。

自分の体を見ると脇腹が深く斬られている。いつの間に斬られたのだろうか。

体の力が抜けていく。

雨は容赦なく飛燕の体温を奪っていく。

意識が消える寸前、飛燕は確かに見た。

自分の両親が笑って手を差し出していたのを

ふぎけるな。杏奈を遺して俺は逝くつもりか。  
まだ紀野原の望みをかなえさせてないんだぞ。

絶対に生きる

飛燕は差し出された手を振り払った。

それを見た両親は何故か微笑んでいた

それでこそお前だ

そんな声が聞こえた気がして

青年は鉛色の空へ吼えた。

自分がここにいるという事を証明するようだ。

俺は絶対に生きて帰る

絶対に生き延びてやる

そう思った途端に、飛燕の意識は闇に飲み込まれていった。  
最後まで、たった一人の肉親の事を思いながら。

鉛色 ・ 空虚への咆哮 ・ (後書き)

シリアス編第2弾です。

脱線してないかな、逸れていないかな、と心配しながら書いております。

誤字脱字あったら報告お願いします。

決意 - 対峙する思想 - (前書き)

日常は変わらない

俺たちが生きている日常は誰かが死んでいく世界

約束された未来なんて無い

未来は自分でしか選べない

決意 - 対峙する思想 -

「……ここは？」

飛燕はムクリと起き上がった。

墓場で倒れていたのは覚えている。

しかし目の前にある景色はどうみても英国の病院の中だった。

杏奈は椅子に座ったまま寝ている。

「起きたか」

男の声に気がついて目を向ける。

そこには茂呂が壁に腰掛けていた。

「妹さんはお前に付きつきりだったぞ。目を覚ましたらお礼くらい

は、言っとけよ」

飛燕は杏奈を見る。

寝ていながら目の下には隈が出来ていた。

「誰が運んだんだ？」

「妹さんだよ。血だらけで倒れてるお前さんを見て急いで病院へ連れて行ったそうだ」

「どのくらい経った？」

「二回ほど晩が明けたな。ちなみに今は朝だ」

「……」

飛燕はベッドから降りる。

「どこにいくつもりだ？」

「……依頼の最中だ。片付けないといけない」

飛燕は自分から出た言葉に顔をしかめそうになる。

そんな嘘についてもこの男には通用しないと分かっているのに。

「止めはしないさ。あんた達の問題だからな」

ほれ、と茂呂は何かを投げる。

飛燕はそれを受け取り凝視する。

それは万事屋に置いていた飛燕の愛刀、残月だった。

残月が渡された事で最低限の事は理解できた。

紀野原が復讐を諦めた事

そして辻斬り事件の犯人が分かった事

「……犯人の情報をくれ」

墓場での戦い。

あの時自分の脇腹を斬った男はただ者ではなかった。

こちらもそれなりの傷は与えたがまだ死んでいないはずだ。

「犯人は、辻斬り組織『鬼道組』だ」

「鬼道組？」



「ああ、ずっと前から存在していたと思われる。そして今は般若党の中に紛れ込んでいる事が分かった。党首は、伊坂新光<sup>いさか しんこう</sup>。数十年前に幕府の家臣だったが何かの罪で幽閉。そこから脱走し行方不明となっている。剣術の腕は……いうまでもないな」

「……般若党の中にか。厄介だな」

もし般若党が気づいていないとすると二つの勢力を同時に相手しなくてはならない。

自分一人で完全に壊滅させられるかは難しいところだ。

「大丈夫だ。赤城達に協力を取り付けてある」

「赤城が！？よく協力してくれたな」

「最初は断っていたが事情を話したら協力してくれた。鬼道組の連中を嘘の作戦で墓場におびき出して奴らを孤立化したよ」

「そうか」

飛燕は、残月を腰に差すと獄焔の存在も確認して扉へと向かう。

「杏奈によろしくって伝えといてくれ」

「分かった」

飛燕はそういって病院を出て行った。

「……いいのか？アイツを止めなくて」

杏奈は目を開けて扉へと向かう。

「兄さんは私が見てないと無茶ばかりするからね」

杏奈は軽く笑うと扉に手を掛けた。

「応援はいるかい？」

「うーん……」

飛燕は墓場の真ん中に立っていた。

自分の血痕が乾いている。

先ほどから体のあちこちを巻いている包帯を引きちぎり捨てる。

「けが人はじつとしてなきゃ駄目だ」

何かに囚われた様なぬるっとした声がすると共に周りからぞろりと鬼道組の団員が出てくる。

こないだよりも数は少ない。

そして、一人だけ明らかに浮いている存在がいる。

他の連中と纏っている気配が違う。

おそらく壮年の男。あれが伊坂新光だろう。

その空気はどことなくかつての自分と似ていた。

同じなのだ。自分と。

かつて飛燕に、そして紀野原が抱えていた闇がその男にもあった。

「あんたが伊坂新光か……あの時は斬られたって気づかなかったぜ」

「私もだよ。あと少しで死ぬところだった」

伊坂は着物をぐっ、と掴んで横にずらす。

そこには、大量の傷が刻まれていた。

刀や槍の物もあるが火傷や何か打たれたような痕、全身が傷だらけだった。

今すぐその体に刀傷をつけてあの世に送ってやりたい感覚に襲われる。

だがその前に聞かなければならない事があった。

「一つ聞きたい事がある」

「何だね？」

「数十年前、ある家族4人が辻斬りに襲われ男女2名が死んだ事件知ってるか」

「確か辻斬りが子どもに殺されたやつか？それなら私が指示したよ」

「……何で命令した」

伊坂はよくぞ聞いてくれました、といわんばかりに両手を張り上げる。

「取り返したんだよ。笑っている顔、その物が。どうして私だけが奪われて他の者には与えられていくのか……。だったら答えは一つだ。自分のものだったはずの笑顔を取り返せば……」

…」

「黙れ」

飛燕は伊坂を睨みつける。

その目に宿るは、怒り。

伊坂は背筋が震えた。

今まで何人もの侍や忍者と戦ってきたがここまで感じたのは初めてだった。

鬼神

例えるならその一言だろう。

そしてその目を見たときある事に気づいた。

「お前……まさか、あの時の子どもか？」

目の前の光景がフラッシュバックする。

雨が降りしきる中、刀を握り立ち尽くす少年。

その目はどこまでも悲しかった。

まるで糸の切れた操り人形のように。

伊坂は、その光景を見ていた。

あの時、この子どもはどうなるのかと思っていた。

その答えは今、目の前にいる。

あの時何も宿っていなかった目。

今は決意と覚悟が感じ取れる。

「……もう答える必要はないだろ。俺はあんた達を全員ぶつた斬る。それだけだ」

この男は、阿弥浜の全てを殺すつもりだ。  
そう思うと共に飛燕は、二つの刀を抜いた。  
伊坂はゆっくりと口を動かし同時に柄に手を添える。

「侍の一太刀は重い。何故か知っているか。その一太刀に生きてきた全てが宿っているからだ」

伊坂も刀を抜いた。  
鬼道組の一味も刀を抜く。

「俺にとってアイツらは家族だ。もう二度と失わない。俺の家族は絶対に守る」

阿弥浜の住人たちの顔が浮かぶ。

この国を憂い攘夷の炎を志しこの国を救おうとする赤き侍  
己に葛藤しながら自身の全てを尽くし平和を守る正義の侍  
全ての人を救おうとひたすら手を伸ばし続ける異人の少女

飛燕は、獄焔と残月を構えた。  
もう負けない。

絶対に生きて帰る。  
そして、あの馬鹿の目も覚まさせてやる  
守ると決めたのだ。

自分の無力さを呪った時から。  
この手で人を殺した時から。

「守ると決めたものは絶対に守る……それが俺の侍道だ！」

飛燕に殺到する死の影。

彼はそれらに向けて刃を振るう。

ただ、守るために。

決意 - 対峙する思想 - (後書き)

…… 本当に話し逸れてませんか？  
段々怖くなってきました。

誤字脱字報告よろしくお願いします。  
ちなみに次回、長編完結です。

決着 - 歩みだす未来 - (前書き)

生きる事から逃げるな

明日生きてる保証なんて無い

だからこそ

今を生きる



決着 - 歩みだす未来 -

飛燕の刀はまさしく鬼道組自体を圧倒していた。既に半数近くがやられている。

その時、一人が飛燕の後ろを取った。

終わったな

伊坂はそう思い飛燕を見る。

だがその一人は飛燕に近づく間もなく血飛沫を上げて地面に倒れた。飛燕を包囲していた党員の輪がじりじりと広がる。

「本当に、兄さんは無茶ばかりするね」

何者かが上から降りてきて飛燕と背中合わせに忍者刀を二刀構えていた。

いつも着ている着物ではなく、くのいちが着る戦闘服に着替えていた。

「やっぱりな……お前寝たフリ下手だぞ？」

「!……な、なんのことかなあ？」

飛燕は思わず口元を緩めた。刀を握りなおす。

「雑魚は任せていいか？」

「もちろん」

飛燕は、獄焔を納め伊坂向けて走る。  
道中に黨員が乱入してきたが足は緩めなかった。  
その黨員は全員仰向けに倒れる。  
胸にはクナイが刺さっていた。

「伊坂あああああ！！！」

飛燕の刀と伊坂の刀がぶつかり合い強い火花を散らす。  
その火花は、双方の思いを表しているようだった。

何だ……雑魚ばかり……

杏奈は吐息を漏らす。  
兄である飛燕を瀕死に追い込むくらいだからどのくらい強いのだろうと期待してきた。  
だが黨員の目から感じ取れるのは、ちんぴらが思いそつな不純な考えくらいしか分からなかった。

「何だ、女か……じゃあ殺しちゃいけねえな」

一人の黨員の言葉に周りが汚い笑い声を上げる。  
ちなみに杏奈は飛燕ほどではないが戦闘狂である。  
弱い相手に、馬鹿にされて平然としていられるほど彼女は易しくない。

「へえ、言ってくれるじゃない。じゃあ先に殺ってあげる！」

その言葉と共に黨員数名の体が宙を舞った。  
そして地面に倒れると共に動かなくなる。

「え？」

鬼道組の黨員は文字通り蹂躪されていく。  
子どもに遊ばれるおもちゃの様に次々と宙を舞っては動かなくなる。

「やっぱり兄さんの方がやりごたえがあるわね……」

飛燕と伊坂の戦いは、言葉通り剣劇であった。  
どちらかが振るえばどちらかが防ぐ。  
ただその繰り返しだった。  
だが伊坂は徐々に押されつつある。

何だ？急に速度が……

すぐに距離をとり刀を構えなおした。  
飛燕はすぐに突進して刀を振り下ろす。  
その速度は、先ほどよりも速い。  
伊坂は飛燕の目を見る。  
その目は、戦いに飢える獣そのものだった。  
悟った。

自分は彼に勝てないのだと。

そう、伊坂と飛燕には一つだけ決定的に違う事があった。  
戦いの中に飛び込んだ速さだ。

飛燕は、幼い頃よりその手を血で染めてきた。  
何度も襲われただろう。  
何度も利用されただろう。  
ずっとその繰り返ししの人生を歩んできたのだ。  
並大抵の人間ならすぐに死んでしまふ過酷な道を。

「終わりだ」

飛燕がそう呟くと共に、伊坂は自分の意識が遠のいていくのを感じた。

「……ん」

飛燕は伊坂が握っている刀に何か文字が彫られているのが見えた。

「祇園精舎……」

そこに彫られていた文字を読み上げる。

平家物語の最初の言葉だ。

祇園精舎の鐘の声。

そつえばと思ひ墓場を見回す。

「そろそろかな、代官所の人達が来るはずなんだけど……」

飛燕は杏奈の言葉に耳を貸さず朽ちた鐘の中を調べていた。  
奥に隠すように手紙が置かれていた。

その手紙の文面を見ようと思ったが思い留まる。  
分かったのだ。

この手紙を書いたのは誰か、そして届けたいのは誰か。  
苦笑いしようとするが声が出ずに空笑いとなってしまう。  
やはり何も変わらないのだ。  
人が死んでも世界は何も変わらない。

「……………雨か」

いつの間になくなったのか、雲が空を覆いつくしていた。  
雨が降り出し、地面が濡れていく。  
そして飛燕についていた大量の返り血も流されていく。  
もしこの雨が、あの時と同じだったとしたら。  
俺を許してくれているのだろうか。  
その問いには、誰も答ええない。  
沈黙だけが答えを持っていた。

「兄さん……………大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。帰ろう」

そうだ。俺たちの家に。  
飛燕は、杏奈の髪が彼女の顔に掛かっているのに気づいた。  
その髪を払う。

「え？兄さん？」

「目の前を見えるようにしとけよ。台無しだぞ」

「……………うん！」

数日後

飛燕は、代官所の地下を訪れていた。

牢屋などがあり囚人が留置されている。

飛燕は、目の前にいる囚人を見る。

その囚人は伊坂だった。

既に目の輝きは消えうせており、ただ死をたんたんと待っている様に見える。

「ここですわ。……気をつけなさい」

「ああ、ありがとう」

ここまで案内してくれた万由に礼を言って飛燕は、伊坂と向き合う。

「……何のようだ」

「単刀直入に言う。あんたに渡す物がある」

「俺に？」

飛燕は伊坂に手紙を渡した。

「さっさと読め」

伊坂は手紙の主を確認する。

目を見開くと急いで手紙を読み始めた。

「あなたがこの手紙を読んでいるとき、私は死んでいるでしょう。変な気持ちです。自分が死ぬ前に手紙を遺すのって。ですがこうでもしないと死に切れません。」

私が病魔に侵されていると知ったとき、あなたはあらゆる手段を使って私を治す方法を探してくれたり、わがままな私に看護をしてくれた時、あなたの妻でよかったと思います。

私があなを好きになつた理由は、笑顔です。

あなたの笑顔は、どんなに苦しい時でも私を勇気付けてくれました。そしてあなたの優しい言葉。

もう駄目かも知れないと思つたときもあなたの励ましがなければ、私はとうに死んでいたかもしれません。

本当にありがとう。こんな私を妻にしてくれてありがとう。

その剣術もその言葉もその笑顔も私は全て覚えています。

もう私のことは忘れてください。

そして誰かの笑顔を守るために生き抜いてください。

自分だけではなく、周りの人も一緒に救う。

そんな優しいあなを置いていく私を許してください。

最後にもう一度言わせてください。

こんな私を妻にしてくれてありがとう

あな

たの妻より」

伊坂は手紙を握り締める。

涙が溢れ出て、言いたい事がありすぎて言葉に詰まる。

「ありがとう……ありがとう……」

そのありがととは、妻へ向けたものだったのだろうか。  
飛燕には、泣いている伊坂を微笑みながら慰めている女性の姿が一瞬だけ見えた。

「……」

飛燕は黙って踵を返す。

「どちらへ行かれます？」

「また後で来る。出口に案内してくれ」

「……分かりました」

飛燕は少しだけ立ち止まる。  
頭の中で雨の音が聞こえる。

父上！母上！

もし、あの世というものがあつたなら両親は自分を許してくれているのだろうか。

飛燕は、少しだけそんな事を考えた。

さらに数日後

「伊坂新光、出る」

阿弥浜代官琴吹光が牢の戸を開けた。



まだ刑には早い。

それともここで斬られるのだろうか。

もし妻に会えるのなら、それも悪くない。

だが琴吹から何かを差し出された。

それは役人などが着ている服だ。

しかも生地からするとかなり高い位のだろう。

「どうということだ？」

「まったく頭を下げなさそうな奴らから頼まれてな。それに阿弥浜を救った者からの頼みもあらば断れまい」

飛燕達が鬼道組を壊滅に追い込んだことは阿弥浜中に響き渡っていた。

そのため今の阿弥浜には、飛燕や杏奈を英雄視する者も多く役人として誘うべきだとの声も上がっている。

伊坂は苦笑いすると服を手に取り着替え始める。

完全に着付けを終えると琴吹は刀を差し出した。

「では、お前は名を改める。もう辻斬り伊坂新光ではない。阿弥浜の平和を守る者。副代官、藤堂昇だ」

男は差し出された刀を腰に差す。

そして琴吹に跪いた。

「本日付より、阿弥浜副代官を務める藤堂昇と申します。阿弥浜の平和を守るために身を粉にする思いで職務を全うする心がけでございます！」

数日後

飛燕と杏奈は、町を歩いていた。

近頃仕事三昧だったので気分転換と、仕事で貯まるに貯まった金で  
買い物しようとして来ていたのだ。

人々は、飛燕達の顔を見るとお礼を言った。

中には、お金までくれた人もいるのだ。

「何か恥ずかしいね」

「まあ、確かにな。っとここだったけ」

呉服屋の前に行き店に入ろうとすると怒声が響く。  
喧嘩だろう。

以前なら飛燕達が仲裁に入っていたがもうそんな必要もない。

今の阿弥浜には、頼もしい者がついているのだ。

刀と刀がぶつかり合う音と何かなぐりつけたような音が続けて聞こ  
える。

そして飛燕達に近づいていく音。

その音が過ぎ去った時、飛燕と杏奈には声が聞こえた。男性と女性  
の声だ。

男性の声は、もう迷いを振り切り新しい未来を歩こうという希望が  
こもっていた。

女性の声は、片時も離れず見守っていきこうという健気だがどこか頼  
もしい感じがこもっていた。

飛燕は少し笑うとその声をもう一度思い出した。

どこまでも青く澄み切った空を見つめながら。

ありがとう

決着 - 歩みだす未来 - (後書き)

長編完結です……疲れた。

話……逸れてませんか？

誤字脱字よろしく願います。

本能 - 止まらぬ慟哭 - (前書き)

人は壊れるもの

本能 - 止まらぬ慟哭 -

「ん……」

まどろみの中飛燕はうつすらと目を開ける。

目の前にいるのは杏奈。

着物が崩れており飛燕は混沌に落ちかけている思考を必死に整理した。

「えっと……あーそうだったな」

発端は昨晚。

飛燕が寝ていたところ、突然杏奈が襲い掛かってきたのだ（別の意味で）。

それからの事はよく覚えていない。

何せ前の仕事が阿弥浜を震撼させた辻斬りとの戦いだったので疲れが溜まっている。

そついや、医者にも怒られたな……

伊坂との戦いの後、飛燕は杏奈によって無理やり病院へと連れ戻された。

病院では、医者とローラに怒られ、看護師などには珍しい目で見られ、一番最悪なのは、3日ほどあれば治ると言われていたのが全治7日と言われた事だ。

病院で寝ているというほど暇なことはない。

それから解放され、伊坂の妻が遺した事を伝え、飛燕はようやく仕事を終えたのだった。

飛燕は空を見上げる。

「やっぱり阿弥浜の空が一番いい」

そう言つて刀を差し朝の修練に向かう。

前回の依頼で分かつた事は自分の実力が落ちているという事だ。

正直なところ、剣筋が甘くなつてたりきちんと仕留めきれなかつた場面が多々あつた。

人目のつかない海岸に下りて刀をすらりと抜く。

「さてと……やるか」

ひたすら動きつつ想像している物を斬る訓練を繰り返す。

これを1時間ほど行つたあと飛燕は刀を鞘に収めた。

最後は、何かを見つけること。

目を瞑り集中していると何かが目の前に明らかにあるような感じがする。

そして何かを感じ取つた。

飛燕は目を開いて抜刀し切り裂く。

水が二つに裂けて一瞬だけ地面が見えた。

吹き飛ばされた水が小さな雨となつて周辺に降り注ぐ。

「……これくらいか」

納刀し階段を上がり道路に出る。

阿弥浜の風景はすっかり変わつていたが見覚えのある場所が数多く残っていたのは幸いだつた。

あの過去と決着は付けた。

だがまだ煮え切らないものがある。

攘夷戦争だ。

かつて異国が来た際、この地をふませないと奮起し戦いを挑んだ者

たちがいた。

その中に飛燕は含まれているのだ。  
血の匂いが鮮明に蘇ってくる。

「ま、慣れてるしな」

飛燕は万事屋へと足を運んでいった。

「えっと……どういうこと？」

「大老様が阿弥浜に来るのだ。お前達には、その護衛を頼みたい」

「でも魔麟組がいるから問題ないんじゃない？」

「それが……近頃凶悪な攘夷浪士が目撃されていてな」

飛燕の眉が微かに動いた。

攘夷戦争で生き残ったのは飛燕を含め3人しかいない。

一人は外国へ旅立ったはず。ではもう一人は……

「その浪士の名前、わかるか？」

「たかくちしゅんすけ高口駿介だ。かなり凶悪な人物で全国に手配書が回っている。知  
っているのか？」

「ああ、ちよつとな」

飛燕の目は暗くまるで闇を閉じ込めているかのように見えた。



琴吹は詮索する事ではないと考え依頼の詳細を告げて万事屋を後にした。

「兄さん、もしかして……」

「気にするな。若気の至りってやつだよ」

「いいか！もうすぐ大老様が到着なされる！全員気を抜くな！」

琴吹の命令で役人たちが散開する。

暗闇脳天も動いており杏奈の命令ではないらしい。

飛燕と杏奈は別々に分かれていて杏奈は屋根の上に飛燕は宿の壁に背を預けてじっとその集団を見ていた。

遠くからみこしのようなものを担いでいる別の集団が見える。

「鬼怒川……」

飛燕は老人を見て咳く。

放浪していた頃幕府から家臣にならないかと誘われたことがある。

無論断つたが將軍の隣にいた老人らしき男の目は野心に燃えていたのを覚えている。

一度手合わせをした事もあるが鬼怒川はかなり強かった。

剣筋が早く気を抜いたら一瞬で斬られるほどである。

琴吹や茂呂が己の役所と名前を述べて礼をしている。

「……っ！」

ゾクリとした視線を感じ急いで視線を動かす。

いた。

あの男が。

鬼怒川の近くまで迫っている。

「まずい！」

飛燕は急いで走り出した。

あの男は何をしでかすか分からない。

大老を守るつもりはないが周囲の人間が巻き添えを食らう可能性がある。

「間に合ってくれよ！」

「あんたが大老かい？」

三度笠を被った男は鬼怒川に怯えもせず問う。  
琴吹が鬼怒川を庇うようにして立つ。

「お前、何者だ」

「俺かい？俺あ」

男が三度笠に手を当ててどこかへと投げる。  
それと同時に男を囲んでいた役人が鮮血を吹き出して倒れた。  
琴吹は刃が振り下ろされる寸前に刀で受け止めていた。  
だが琴吹の刀にひびが入っている。  
しかも琴吹が両手で受け止めているのに対し男は片手。おまけに涼しい顔で琴吹を見下していた。

「あらあ、その服に綺麗な赤模様つけてやろうと思ったのに」

男の体は何者かに蹴り飛ばされた。  
飛ばされた男は受身を取る。  
蹴り飛ばしたのは飛燕だった。  
既に抜刀していて目は獲物を狙う目になっている。

「高口……」

「おいおい、どこかで見た顔だと思ったたら黒宮じゃねえか。元気そ  
うだな」

「悪いがお前と談笑してる時間は無いんだよ」

「談笑ねえ……あの頃はお互い仲良く異人共をぶった斬つてたのに。  
気がつけや互いに獲物持つてにらみ合つてる訳だ。皮肉だなあ」

「黙れ」

高口と飛燕の刃がぶつかりあう。  
そのまま二人は常人には真似できない早さで剣舞を繰り広げる。  
そして互いに同時に動きを止める。

「お前、まだ攘夷なんてやってるのか？」

「攘夷？ちげえよ。俺の目指すものはそんなちっぽけなもんじゃねえ。もつとでかいもんだ」

その時、飛燕の肩を銃弾が貫いた。

「くっ！」

飛燕の本能が銃弾を放った者の場所を瞬時に予測し飛燕は腰の短刀を投げる。

短刀は家内の間に飲まれ中から断末魔と何か重いものが落ちる音が聞こえた。

「飛燕、今お前を貫いたのは銃弾。安いもんだぜ。刀って言うのは相手に近づけねえと意味が無い。だが銃は違う。引き金引くだけで人を殺す鉄が飛んでくんだ。おもしれえだろ？」

「高口、お前まさか……」

「俺の目指すものは破壊だよ。アメリカもイギリスも日本も全てを潰す。潰せりゃ俺は満足だ」

「堕ちたな。高口……」

「堕ちた？ちげえな。戻ってきたんだよ」

そういつて高口は不気味に笑う。

飛燕は不適に笑う。

「戻ってきたか……だったら次の俺の行動は予測してるはずだろ？」

「何を……！」

高口の体を銃弾が貫いた。

撃たれた箇所を押さえ苦しそつに喘いでいる。

「お前つ、何をしたっ……」

「こつちには、最高の仲間がいるんでね」

高口は飛燕の奥の建物の屋根を見る。

少女が銃をくるくると回してこつちを見ていた。

「あのアマ……」

「ま、そついうことだ。おとなしく斬られる。お前は危険だ」

「斬られる？危険なのは何か教えてやるうか？」

その時騒動を遠巻きに見ていた住人が刀を構えた。

全員変装用衣服を脱ぎ戦に向かう武士のような鎧を着ていた。

「人の本能だよ」

そついう高口の顔はどこか酷く歪んでいた。

親友 - 変わり行く者 - (前書き)

人は生きている事を伝えていく

自分という人間は確かにここにいたという事を

それは未来を紡ぐという事

親友 - 変わり行く者 -

飛燕と高口は壮絶な斬り合いを繰り広げていた。

前回の辻斬り事件いらい、役人たちが訓練していたのが見えたので高口の部下はすでに半数以上減っている。

「人の本能ね……お前がそれを言えるか？」

高口はさらに不気味に笑う。

その顔はもはや人ではない。

「それはお前が示してるだろ？ たくさん異人を斬り、大量の同胞を失い過去から目を背けたお前だよ。お前はただ人が斬りたいだけだ。なあ、死神？」

「……………」

飛燕の剣速がさらに加速していく。

高口はそれを涼しい顔で捌いていた。

「ホントお前は恐ろしいよ。攘夷戦争では仲間英雄と呼ばれ称えられて、英国あいつちじゃあお前は黒き死神と呼ばれてるぜ？」

「異国に名を残すか。そりゃ光栄だ」

飛燕の目は笑っていない。感じるのは純粹な殺気。

高口はそれに動じずに己へと迫り来る刃を捌いて弾く。

飛燕の胸がから空きになり高口は刀を構えた。

「過去から目を逸らした死神はここで朽ちな」

飛燕はふと考える。

死神、そう呼ばれたのいついらいだろう。

あの時の俺は本当にがむしやらだった。

ただ目の前の敵さえ斬ればどうでもよかった。

目の前の殺し合いに集中できればなんでも良かった。

だけど今は違う。

本気で守りたい仲間がいる。

本気で守りたい家族がいる。

だから俺は剣を握ろう。

「過去から目を逸らす？」

飛燕は不適に笑い迫り来る刀を上体をそらして避ける。

そして刀を持つ手に力を込めた。

高口の刀が真っ二つに斬られその一部は地面に落ちて寂しい音を立てる。

「なっ………!!」

「昔に目逸らしたままなら」

今まで出会った人々の事を思い出す。

阿弥浜に来るまでに出会った多くの人たち。

それぞれの人達が自分たちの大切な物語を持っていて、その物語と向き合っている。

あの人達と出会い自分は変わった。

自分と向き合う事について大事な事だと分かった。



「今の自分と向き合う事なんてできやしねえよ！」

そういつて無手の方で高口を殴り飛ばす。

殴られた高口は桶を巻き込み壁に衝突した。

「ホント、お前は甘えな……何で斬らなかった？」

「……気まぐれだ」

「じゃあ甘えさせてもらうか」

そういつて高口は屋根を上げる。

再び振り返った高口の目はどこか楽しそうだった。

そしてそのままどこかへと去っていく。

飛燕の隣に杏奈が立つ。

彼女の刀も血で濡れていた。

「いいの？兄さん」

「……さあな。さ、依頼は終わった。報告に行くぞ」

「……うん」

依頼は何とか成功したが役人の3分の1が高口の組織により死亡した。

これにより高口駿介は全国各地へ手配書が回されるも足がかりは掴めなかった。

報酬ももらえたが杏奈から見た飛燕の目はどこか悲しくて怯えているように見えた。

依頼当日の夜、飛燕は屋根へと上がっていた。

「俺もまだ捨てきれていないな」

飛燕は空を見上げる。

空の闇は全てを飲み込もうとするかのようにどこまで黒かった。

大老襲撃の翌日、日本のとある場所にて高口は何名かの人物と会話していた。

女性も混じっており彼らの目はどこか狂気に侵されている。

「どうだった？俺たちに死神と呼ばれ恐れられた男は？」

「確かに……あれほどの男が味方につけばこわいもん無しだな」

「勧誘する？」

「いいや、アイツは本当におもしろい……昔に目逸らしたままなら今の自分と向き合う事はできやしねえ……か」

「どうした？高口」

「飛燕が俺たちと敵対してる限り、現段階で勝つことはまず不可能だ」

「どっつするっ？」

「ま、力を蓄えるのが一番だな」

闇は笑う。

光も笑う。

光と闇の狭間にいるのは人。

そんな言葉をふと思い出す。

高口は煙草をふかした。

殴られた方はまだ痛む。

正直なところ、今回の襲撃はうまく行くと思っていた。

だが一人の兄妹の乱入により全てが狂わされた。

「高口、今度はどこを攻める？」

「そうだな……」

「外国にでもするか」

英国へ（前書き）

「兄さん、最近私のこと忘れてない？」

「そうか？ 気にかけてるつもりなんだが……」

「ソーナノカナー？ サイキンノニイサンツテバヨクサンシマイト  
キヤツキヤウフフシテルヨネー」

「お、おい杏奈？ 何か目の色が……」

「ネジマガツタセイカクハモドサナイトネー」

チャキ

その後、飛燕の姿を見たものはいなかった……。

「ハッ……夢か……」

## 英国へ

「英国に来ないかって？」

「はい！」

内心呆れている飛燕を前に、笑顔で頷くローラ。

今回、飛燕と杏奈に持ち込まれた依頼は一緒に英国に行つて日本人のすばらしさを女王に認めさせ大使としての日本訪問期間を延期させてくれないか、という内容だった。

その依頼は飛燕の本能が面倒事だと盛んに警報を鳴らしている。

多分、般若党が聞いたら乗り込んでくるな……

そんな事を思いながら飛燕は水を飲む。

いつもは何とも感じない水の味が今は嫌というほどよく分かる。

「……悪いけど俺はお前らの国の言葉話せないぞ？」

はっきり言つて外国まで行くのはものすごく面倒くさい。だからと  
いつてそれを理由にして断ると信頼が落ちる。だったらそもそも  
条件をつければいいだけの話だ。

しかし飛燕の逃げ道である言葉を潰したのは杏奈の台詞だった。

「大丈夫。私は話せるよ！」

飛燕は内心顔をしかめる。

外国人の言葉まで分かるって本当に凄いな、忍者は……

ため息をつきたくなる衝動に駆られたが何とか堪え依頼の話を進めていく。

ちなみに飛燕は勉学が苦手なほうだった。

「費用はどうするんだ？ 後出発はいつになる」

「費用は私たちのほうで持ちます。出発は……明後日の朝ですね。私にメリンダ、伯爵と数名の護衛と共に行きます。留守中のことは代官の方々に任せてあるので心配なく」

「後で藤堂にも頼んでおくか……頑張ろう」

人生初の猛勉強が始まった。

だがその時、飛燕はまだ気づいていなかった。

杏奈が不適に笑っているのを……。

「し、死ぬかと思った……」

飛燕は船の手すりにもたれかかり疲れきった顔をしていた。彼の隣に鳥が止まり一つの図をして見ると鳥が人間を慰めているように見える非常にシユールな光景だ。

空にはまだ完全が日が昇りきっておらず、地平線から見える光が海を照らしていた。

飛燕と杏奈は黒船に乗っており阿弥浜の町を発とうとしている。

食料なども外国が負担してくれるので徐々に腹がふくれるまで食べられる。

そして杏奈のスパルタ勉強は、戦いではめつたに疲れを見せない飛燕ですらわずか1時間で疲れさせるほどである。

「頑張ったね。兄さん！」

実は杏奈が飛燕にさせた勉強は、英国の言葉を覚えさせると共にそれを体に刻み込ませ忘れないようにするためにとある仕掛けが施されていた。

「……拷問受けながら勉強するなんて聞いたことねえよ」

それは万由、千佳、百合の拷問を受けながら勉強するという（杏奈いわく、どんな人でも外国の言葉がスラスラ身につくらしい）想像を絶する方法だった。

ちなみに三姉妹が飛燕を拷問する順番で争っていたのは余談である。千佳はギリギリ耐えきれたが万由はかなり苦しかった。

一番酷いのは百合だ。

つるし上げにして下に三角木馬しかれて炎で焼かれ鞭を受けるなんて勉強どころじゃない。

しかも鞭が以前渡した電気棒になっているためさらに酷い。

アレはさすがに死を覚悟した。

ちなみに拷問用のハンドルを回していたのは杏奈である。

その顔がまるで悪魔のような笑みを浮かべていた光景を飛燕は死ぬまで忘れないだろう。

飛燕からすれば拷問の虜になる人間の真意が分からない。

ただの苦痛が何故快樂へと変わるのか理解できない。

言うておくが丸二日間、飛燕は代官所に閉じ込められその地獄合宿を受けていたのだ。

休む時間はまったくといっていいほど無かった。

「でも効果はあったでしょ？」

「……まあな。でもしばらく代官所に行きたくない」

「私も程々でいい、って言ったんだけどなあ……」

ゼツタイウソダ

飛燕は思わず口に出しそうになった言葉を飲み込んで苦笑いする。蒸気音と共に景色が動き始めた。出航したのである。

「ちょっとローラの所行ってくる。聞きたいこともあるしな」

「じゃあ、私は部屋戻っておくね」

「ああ」

ローラは船の手すりから海を見ていた。

よく帽子飛んでいかないな……

そんな事を思いながら飛燕は近づく。

「あつ、飛燕様。どうされましたか？」

「簡単な情報が聞きたくてな。前みたいに船から上陸したら突然争いごとに巻き込まれるのは御免だ」



あれは本当に無茶苦茶だった。  
この世の中で、故郷に帰ってきたらいきなり理不尽な戦いに巻き込まれた人間がいるのだろうか。

「大丈夫です。今回は私たちがいますから」

頭の中に前回襲撃を掛けてきたある男がよぎる。

あの男の仲間は銃を使っていた。

しかも杏奈が持っている銃の威力じゃなかった。

あれほどの銃をどこで入手した？

もし英国の裏組織と繋がっているとしたら？

飛燕は不安を拭いきれなかった。

「……そうだな。お前が危ない時は俺が守ってやるよ」

「えっ？」

「お前は大使なんだ。その手や部下を血で汚す必要は無い」

「あ、ありがとうございます」

飛燕はふと思う。

もし今まで殺した人の返り血を全て自分の体に再現したらどうなっているのだろうか。

おそらく全身真っ赤になっているはずだ。

だが分かっている。

初めて人を殺した時、決意したのだ。

これから歩む道をすべて人の血で染める覚悟も出来ていた。

「じゃあ部屋に行って寝てるから飯になったら起こしてくれ」

「はい、分かりました。ごゆっくり」

香りのいい潮風が彼の頬を撫でていく。  
それがとても心地良かった。

## 英国へ（後書き）

くっ……まったく筆が進まない……。

前書きですが短編です。

シリアスモードに入ると必ず真面目に、ギャクパートでも時々真面目になど……気分が変わります。

ちなみに今回のイギリス編も長編です。

いつなったら短編は書けるんだっ……。

## 英国到着

船に乗ってから数日、目的地へと着き二人は歓声を上げた。

「さすが英国……すげえな……」

「噂には聞いてたけど……ホントだね」

港には人々の群集があつて大騒ぎだった。

甲冑を着た兵士たちの姿も確認できて列を作っていた。

その列の最後尾にあるのは馬車。

それもかなりの装飾が施されており彼女がどれだけの人物なのかを  
図らせている。

ローラ達には歓声や尊敬の視線が、飛燕と杏奈には一部から軽蔑の  
視線が注がれていた。

「飛燕様と杏奈様、お二人はお客様であるので私の傍にお願いしま  
す」

「……分かった」

飛燕は息をついた。

自分は日本人なのだ。

その誇りを忘れてはならない。

それさえも失つてしまえば自分はただの殺人人形になったも同然だ  
からだ。

ローラが港の土を踏んだ時並んでいた兵士たちが一斉に礼をする。

その動作だけで兵士たちが歴戦の兵である事がうかがえた。

兵士たちの剣に視線を向ける。

メリンダが使っていた物と同型であるが単純な質では一般的な刀を上回るだろう。

兜らしきものを被っておらず素顔が見える。

「……女性？」

金髪の女性がいた。

他の兵士たちとは違う。

戦士としての顔にどこか少女らしさが残っておりその目は飛燕と杏奈を完璧に敵視していた。

「女王直属の騎士団です。かつてメリンダも隊長だったんですよ」

「魔燐まごほう組みみたいな物か」

頭の中で納得しローラの後を着いて行く。

一部の野次馬や兵士達から向けられる視線は敵意と軽蔑。

何でお前らがここにいるんだ

そんな声が聞こえてきそうだった。

もう慣れている。

こんな視線苦しかった少年時代に比べれば遥かにマシだ。

ローラも気づいているのだろう。

その肩は震えていた。

どこまでこの少女は一人で背負い込むのだろうか。

そのような小さな体で受け止めようとするのか。

飛燕にはそれがもどかしかった。

「では、どうぞ」

ローラが馬車へ手を向ける。  
どうやら二人を先に乗せようとしているらしい。  
さつきから向けられていた視線がさらに厳しくなる。

「いや、ローラが先でいい。俺たちはお前の従者なんだ」

「え、あ、はい。では……失礼します」

ローラが馬車へ乗り込んだのと同時に飛燕は自分に飛んできた何かを手で止める。  
手の中にあつたのは石。  
思わず噴き出しそうになった。

「ちょっと……!!」

「杏奈、放っておけ。赤城達みたいな信念が無いからこんな軽率な行動をとるんだ」

だからといって大砲なんか出されたら洒落にならないが……。  
そんな事を考えながら飛燕は馬車に乗り込む。続いて杏奈も乗ってきて馬車の扉が閉まった。

「ローラ、無理に背負うな」

「背負う?」

「言っちゃあ悪いけどお前はまだ子どもだ。そんな年で何もかも背負い込むな。お前は大使なんだ。日本と英国が仲良くなれる事だけ

考えてればいい。面倒な事は俺たち万事屋に任せとけ」

なんでも自分のせいだと背負い込む。

その姿はどこか自分の姿に似ていて少しせつない。

「はい、ありがとうございます」

馬車に揺られる事数分、目的の場所へと着いた。

二人の前に鎮座しているのは巨大な城。

江戸城なんかとは比べ物にならない。

「こりゃ將軍様もびっくりだな」

「侵入するなら……」

杏奈が物騒な事を考えているので頭を軽く叩いてローラの後へ続く。

やはりここでも一部の兵士達から敵視される。

ここで飛燕はようやくあることに気がついた。

「そつか、攘夷戦争か……」

「どうしたの？」

「いや、独り言だ」

「？」

飛燕はチラリと後ろを見る。

そこには先ほどの少女がいた。

相変わらず敵視する視線を向けてきている。

しかもさつきより強い。

……俺、悪い事したかなあ

頭の片隅で少女に謝りながら城の中へと入っていく。

そこにはローラとどこか似ている女性が王座に座っていた。

日本と言う將軍、つまり女王である。

年齢は34歳あたりだろうか。日本の將軍と比べる若い。

「陛下、日本からの使者をお連れしてきました」

「そう、下がっていいわ。ありがとう、ローラ」

女王の目は子どもを見守る母親のような目。

その目に今は無き両親の面影を思い出す。

「遠くからお疲れ様。私はベリエス・リータ。ローラ・リータの母  
「よ

「俺……じゃなかった、えっと……」

「そう硬くならないで。自然体でいいわ」

「お言葉に甘えて……俺は黒宮飛燕。日本では万事屋を営んでる」

「私は黒宮飛燕の妹、黒宮杏奈と申します。兄と同じ万事屋で共に  
暮らしています」

「ふふつ、元気がいいわね。あなた達、侍？」



「元だけどな」

「私は元忍者です」

ベリエスの言葉は何かを試しているようだった。

飛燕と杏奈は何かを感じ取り互いに視線を交わす。

「忍者……おもしろいわね。ところで飛燕だったかしら、元侍は」

「そうだ」

「あなた、攘夷戦争に参加してた？」

その言葉に周囲の空気が止まるような感じがした。

咄嗟に否定する言葉が口から漏れようとしたがそれを飲み込む。

何故か血の匂いが立ち込めているような錯覚に陥る。

逃げてはいけない

ここで否定すれば死んで行った戦友や異国の兵士達の存在を否定する事になる。

自分と同じ、戦いの中でしか生き残れない者たちの事を。

飛燕は息について決心しベリエスを真っ直ぐ見る。

「……ああ」

何名かがその場から立ち上がる。

杏奈やローラが飛燕を凝視していた。

「それは、本当？」

「どうすればあんな戦争を間違えられるんだ？」

「……」

ベリエスはもう一度飛燕を見る。

その眼差しに敵意や憎しみは一切込められていなかった。

「あなたは……何で攘夷戦争に加担していたの？」

「……苦しかった。どこまであがいても抜け出せない闇の中にあるような感じで。そのことを忘れたかった」

ウソダヨソンナノ

黙れ

「戦いさえそこにあれば、命を賭ける戦いだけがその闇を忘れさせてくれた。だけど戦争が終わってから俺には何も残らなかった。むしろ闇は増していた」

タノシカッタダロウ？ モットキリタカッタンダロウ？

黙れ

「それで、あなたの闇は消えたの？」

「ああ」

ノコツテイルヨ。ホラキミノソバニイツデモボクハイルヨ

消える

「その闇は誰が消してくれたの？」

ココダヨココ。ボクハキエテイナイヨ。イキテイルヨ。ダカラウ  
ソヲツクノヤメ

「今まで出会った人達だ」

幻聴が止んだ。

「その人たちは外れ物だった俺を闇から救い出してくれた。俺の闇の根源を教えてくれて、共に向き合ってくれた」

「……そう」

隣を見ると杏奈の口が何かを形作ってメッセージを作っていた。

もう隠し事はしないで

そういえば彼女には何も伝えていなかった。

無論聞かれなかったから答えなかったといえはそれまでだが。

分かった

飛燕も口の動きだけで返す。

「あなたたちの事は大体理解できたわ。ありがとう」

ベリエスが頭を下げる。  
二人もそれにならない頭を下げた。

「話は変わるけど、私は侍って言うのがどのような物か知らないのだから、教えてくれないかしら？」

「まさか……」

「そつ。私が育てた騎士団と模擬試合をして頂戴」

ローラが「お母様！」と叫ぶのが聞こえた。

飛燕は何か身震いのような物を感じた。

やはり自分は戦士なのだ。

戦いに飢えていると言っても過言ではないかもしれない。  
本当に戦闘狂だな、と自嘲した笑みを浮かべる。

「陛下、私からよろしいでしょうか」

先ほど二人を敵視していた少女が名乗りを上げる。  
周りからざわめきが上がった。

『おいつ、いきなりセラが行くのかよ』

『いいぞ、格の違いを見せてやれっ』

『負けるなよっ』

この場所のほとんどは彼女を応援しているようだった。  
声からして少女はセラという名前のようだ。  
何一つ無駄ない動きで抜剣する。

純銀の剣がきらりと光を反射して美しく輝く。

「杏奈、俺が行く」

飛燕も獄焔を抜いた。

ちなみに高口の襲撃以来、少しでも武器を強化しておこうと思いい二人の持つている刀には改良を加えている。

獄焔はセラの剣より遥かに美しく滑らか曲線を光がなぞり刀身を煌かせていた。

セラは飛燕と獄焔を一瞥すると少し後ろに下がり剣を脇構えに構える。

飛燕も片手で持ち後方に構えた。

まずは様子見だな……

飛燕は少しずつ距離を詰めながらセラの剣や目、手の動き全てを確認する。

セラの目はじっと飛燕を見つめていた。

その視線から殺気を感じる。

彼女の目が少し見開かれると同時に剣が飛燕に迫ってくる。

常人と比べれば確かに速い。

しかし藤堂や高口、杏奈以上かと言われたら話は別だ。

まったく勝負にならない。

少し揉んでやるか

初撃を止めるとすぐに二撃目の剣が来るがそれも止める。

三撃目は止めずに上体の動きだけで避ける。

四撃目の動作が見えたので腹に蹴りを入れてすぐ後方に跳ぶ。

眼前をセラの剣が通り過ぎていった。

彼女は片手で腹を押さえて片手で剣を持っている。

……ひよっとして鳩尾入った？

そんな事を考えた刹那にセラの剣がこちらに迫っている。ただし攻撃の位置は先ほどとほとんど変わらない。

「悪いがそろそろ終わりだ」

そう言うと同時にセラの足を払い転んだところを首に獄焔を突きつけた。

「な、何をした！」

「足を払っただけだ。がら空きだったんでな」

セラの目が一層厳しくなる。

飛燕は獄焔を鞘に収め杏奈のところへ戻る。

「貴様！ 侍という物は正々堂々と戦わないのか！」

「おいおい、戦いは何でもありなんだ。死ねば終わり。単純だろ？  
というか侍の中でこんな変わった戦い方をする奴は俺くらいだと思っ  
思うが……」

飛燕の剣術はオリジナルに近い。

彼の剣術から派生された流派も多い。

例えば鬼怒川三姉妹の一人である鬼怒川万由が使っている捨命流剣術、これも飛燕の剣術を見た鬼怒川怨仙が独自にアレンジして娘である万由に教えたのである。

ちなみに戦国時代にはサマーソルトという空中回転蹴りを2回連続で繰り返すという技もあったらしい。

「1」のっ……」

セラは再び柄に手を掛けようとする。  
その時、男の声が響いた。

「そこまですておけ、セラ」

そう言ったのは騎士達の中でも一風変わった風貌の男。  
無精髭がその男の生き様を物語っているようにも見える。

「团长っ……」

「今のお前では勝てない。いや、俺でも勝てないだろうな」

男の声に騎士達のざわめきが広がっていく。  
よっぽど部下に慕われているようでセラまでもがうなだれていた。  
その様子に先ほどまでの覇気はどこにもない。

「さて、飛燕といったか？ よければ決闘を申し込みたいのだが」

飛燕は軽く背筋が震えた。

この震えは藤堂と剣を交えた時の震えに似ている。

この男は強い

飛燕は思わず柄に手を当てていた。

「ああ、いいぜ」

「それじゃあ、遠慮なくだな」

男は剣を抜いた。

その剣は他の騎士達とは違い、直剣の刃に柄だけを当てたような剣だった。

初めて見るタイプの剣。

それもまた飛燕の闘争心をくすぐるのに一役買っていた。

早速男が動き出した。

セラの動きとは違う。

こちら側に真つ直ぐ突っ込んできた。

先手必勝というパターンだろう。

男が振り下ろした一撃を飛燕は獄焔で止める。

その感触も先ほどとは全然違う。

重く、そして力強い。

「ははっ！」

思わず笑いをこぼす。

さらに振り下ろされた一撃を飛燕は獄焔の刀身をなぞらせるようにして受け流す。

「何っ！」

男が驚いている時、すでに男の剣は床にめり込んでいた。

飛燕は男の剣を踏み台にして空に浮いてそこから男の顔面に回し蹴りを叩き込む。

男は片腕で止めようとするも抑えきれず吹き飛ぶ。

「…………あの近距離で反応した？」



男に回し蹴りを入れようとしたとき既に足は男に届く寸前だった。しかし男はそれに気づいて咄嗟に片腕で止めたのだ。反射的な手の動きが早い。

実力を隠してる……。

「いたたた……強いな。飛燕」

男は立ち上がり飛燕に握手を求める。

その笑みはいたずらに成功した無邪気な子どもに似ていた。

「いや、あんたも中々強かったよ」

飛燕も握手して答える。

「俺はアノルド。アノルド・フォレント。騎士団の団長を務めている。ところでお前の剣術って体術が主体なのか？」

「ん、よく分かったな。こんな短時間でそこまで見切られたのは初めてだ」

「こつ見えても元医者だ。お前の体術は綺麗に人体急所を狙ってたぞ？」

パチパチと拍手の音が聞こえる。

見るとベリエスが満足げな表情で手を叩いていた。

「待って素晴らしいわ。これなら頼んでもよさそうね」

頼むという言葉に飛燕は顔を引きつらせた。

嫌な予感は良く当たるといっがその言葉をこれほど憎みたくなる時は久しぶりだった。

「……何を？」

せめて楽な依頼であってくれ、という飛燕の切な願いは例の如く打ち壊される事となる。

「今、英国中を震撼させている殺人事件の解決を依頼する」

飛燕はため息をつく。何故か英国に入ってからため息の数が多くなっている気がする。

珍しく杏奈もため息をついていた。

英国到着（後書き）

月1更新ペースになりそうです。

後英国編は間違いなく過去最長になります。

……アイディアが浮かばない。

誤字脱字を見つけたら報告お願いします。

切り裂き魔（前書き）

4ヶ月放置……申し訳ありません！

## 切り裂き魔

「英国中を震撼させている事件？」

「日本で言う辻斬りのような物だよ」

杏奈の言葉に「」が答えた。

アノルドはその様子に軽く笑うと話の補足をする。

「切り裂きジャックと呼ばれている事件だ。ロンドンで次々と売春婦達が夜中に殺されている。しかも彼女たちは殺された後臓器の一部を持ち去られているという悪趣味な事件。犯人は分らず足取りもまっただ。その解決をお願いしたい」

「……報酬は？」

「この子の大使としての期間を永久的、そして私個人からの謝礼かしら」

杏奈は額に手を着いている。

飛燕より真面目な杏奈ですら頭を悩めているのだから普通の問題ではない。

確かに国中の誰もが知っている事件なのに犯人が分からないというのは厄介どころではない。

しかもそれが猟奇殺人となれば尚更だ。

だが飛燕の答えは決まっている。

「分かった。受けてやるよ、その依頼」

周りが何度目かのざわめきを起こす。

杏奈は苦笑いしている。

飛燕の不規則な行動についていけるのは彼女だけだろう。

「じゃあ必要な事をしておくわね」

ベリエスが手配してくれたのは、二人の部屋・事件の資料・兵士の鎧の3つだった。

兵士や騎士の鍛錬所は普通に使わせてもらえるので問題は無い。

早速二人は着替え終わって事件の資料に目を通していた。

兵士の鎧といっても全身ではなく、動きやすい箇所と急所の部分につけているだけでかなりの軽装である。

着物と比べると何か変な気がするがとても動きやすい。

しかも相手はかなりの腕を持つ暗殺者である為、基本的には兵士の服装で行動する事にした。

「……状況的証拠しかないな」

「そうだね」

資料を見て飛燕と杏奈が気づいたことは三つ。

まず犯人の数が分かっていない。

相手が複数犯であり組織化されているのなら発見するのに時間が掛かる。

しかも逃走され再犯でもされれば事件は終結しない。

そして犯人は医者かそれに関係ある人物である事。

臓器の摘出、これは一般人がそうそう簡単にできる事ではない。

臓器を持ち出しているというのに証拠まで残らないという手際の良さ。

問題はその臓器がどこへ行ったのか。

それが一番難しいのだ。

飛燕の見立てでは二つ。

一つ目は犯人が医者関係である場合限定だが手術的もしくは実験的な物に使用する事。

だがそれならば殺す必要は特に感じられない。

犯人が人を殺すのが趣味ならば話は別だが売春婦だけを狙いにして  
いる事からそれは否定できる。

二つ目は裏社会的な場所へ売り飛ばす事。

人間の臓器はかなり高く売れる。

飛燕の予想では後者が有力だと考えている。

やはり今の世界は金で回っているということ自体はどこも変わらない。  
い。

犯人の目星も付けられていないという事も考えを裏付ける一つだった。  
た。

「殺されている時間は、金曜日から……日曜か。日付って面倒くさいな」

日本ではまだ曜日という概念はない。

そのため日本人である飛燕と杏奈は少し戸惑っていた。

「今は月曜日……だっけ。まだ時間があるね」

「それまでに力をつけておくのと身辺強化だな。人脈が増えればそれだけ、情報が増える」

「うん、そうだね」

飛燕は獄焔と残影を鞘ごと抜いて壁に掛ける。

「どこか行くの？」

「鍛錬だよ。この国の剣にも触れておきたい」

事件とは関係ないが飛燕は武器に惹かれる傾向がある。

諸刃の剣に触れるという事は今の日本人にとってかなり貴重かもしれない。

飛燕は日本に帰った時、諸刃の剣を自作しようと考えていた。

「気をつけてね。あと迷子になっちゃだめだよ？」

「……分かってる」

どこか否定しきれない自分に苦笑しながら飛燕は部屋を出て行った。



## 異国と故郷と

「結構攻撃向けだな、これ」

夜中、兵士や騎士が使う訓練所で飛燕は一人剣を振るっていた。

訓練所は庭を開いたような感じになっており周囲は通路や休憩のよ  
うなスペースがあり、かなり広い。天井は無く空の様子が一目で分  
かる。

綺麗な満月から反射される光は飛燕を照らしていた。

普段の自分を意識するために着物を着ているが適度な汗を掻いてき  
たので上半身をさらけ出しより集中できるようにした。

自身が刀に慣れているせいか最初は使いづらかったか慣れてくると  
中々面白い。

両方に刃があるという事を意識しながら振るう。

やはり市販の物が扱いにくいのはどこも同じなのだろうか。

そんな事を思いながら出来る限り斬撃をイメージしながら時折体術  
も混ぜる。

一人剣を振るう飛燕の姿は端から見れば華麗だった。

未完成の剣技が徐々に研ぎ澄まされ剣術へと変わっていく。

回避と重心の移動という二つを同時にこなすステップに迷いはない。  
月明かりにより出来る光と影の境目はぼんやりとしておりその微妙  
な違いが美しさを生み出している。

飛燕の特徴の一つである漆黒の長い髪は汗により艶を生み出し妖艶  
に等しい何かを感じさせた。

彼はふと足を止める。

「いるんだろう？ 隠れてないで出て来いよ」

数秒間の静寂の後、一人の少女が柱から姿を現した。  
金髪の髪からすぐに名前を思い出す。

「セラだっけ。どうした？ こんなところで」

セラにあの時のような敵意の視線は無かった。  
むしろ今は何か気まずい事を隠しているような、年相応の表情だった。

視線が飛燕を行ったり来たりと文字通りの動きをしている。

「そ、その……」

「……？ ああ、悪かった」

上半身が露わになっている事に気づいて飛燕は着物を着なおす。  
セラが安堵の息をついているのが聞こえた。

「で、用件は何だ？ こんな時間に散歩って訳でもないだろ」

「あ、あなたに剣を教えて欲しい……」

セラは顔を俯かせばつが悪そうにしている。

「俺とお前ではそもそも使うものが違うぞ？」

「先ほど、あなたの剣を見ていて分かった。あなたは他と違う。あなた自身の剣を私は教わりたい」

セラは突然顔を上げて力説する。

この少女の目は昔の自分と似ている。  
飛燕はそう感じた。

「……どうして剣を高めて強くなりたいと思う？」

「私の父は攘夷戦争に巻き込まれ戦死した。父の武術は私にとって誇りだった。だから私はその誇りを継ぎたい。そのための強さが欲しい」

セラの实力は騎士団の中でも若い上指折りの实力を持っているとメリンダから聞いた事がある。

高い实力を持つのにさらに力を欲する。

それは端から見れば精進にも見えるだろう。

だが飛燕にはそう見えなかった。

少女にも知らない何かが彼女自身を苦しめている。

その様子はローラに似ていた。

世間は意外と狭いって本当だな……

何度目かの既視感を感じながら飛燕は息をつく。

見えないモノに縛られる人というのはこの世界に驚くほど多い。

「誇りのためだけに、まして過去の事に強さを求めるな。お前は一人の少女だ。英雄でも何でも無い」

「っ！ そ……」

セラの目が迷いに揺れていた。

「今から言う事は独り言だ。気にするな」

前にもこんな事があつたなと思った。

前に話した者は今茂呂の下で人々を幸せにしようと猛勉強している。

「……」

「ある国に一人の少年がいた。少年には家族もいて幸せな日々が続こうとしている。だがある日を境にそれは壊れた。現実には少年を闇の中へと追い込んでいく。そして少年はそれから逃げるためにある大規模な戦いに参加した。しかしその戦いで失った仲間の事を負い目に少年は次々と狂っていく。その少年を救ってくれた人達がいる。闇の奥底から救い上げてくれた人がいた。少年はその人達に感謝を捧げ狂っていた自分が落として行った物を拾う旅を始めた。そこから先、少年の行方を知るものはもういない」

「……聞いていいか」

「ん？」

「お前は、その少年は救われたと思っっているのか」

飛燕は月を見る。

そういえば家族が殺された時、月は確かにあの形だった。

あれから自分は変わったのだろうか。

思わず笑いが漏れそうになる。

「どうだろうな。その少年のこれから次第じゃないか？」

そんな事を呟いていた。

本当にくだらない。

自分の先に光などあるはずがないのに。

「私が……」

「どうした？」

セラは飛燕を真っ直ぐに見つめる。

その瞳に今までのためらいは無かった。

「私とその少年を導く。その少年が闇へ落ちていくというのなら私が止めて見せる」

飛燕は絶句する。

この話をすると大半の者は可哀想と他人事だと思っだろう。だがこの少女は少年を導くといった。

飛燕は珍しくしばらく呆気にとられてそれから突然笑い出す。

「な、何だ。急に！」

「いや、そんな珍回答をする奴はお前で二人目だからな、懐かしくて笑い出してしまった」

「あ、ああ……」

彼女の心は誇りという見えない物に縛られていた。

飛燕はかつて一人の仲間を思い出す。

復讐に駆られ、誤った力を持ってしまい狂い続けている一人の戦友を思う。

「分かったよ。ただし俺からは教えない」

「なっ、どういう事だ!」

先ほどとは様子が一変。

むっとして怒り出す。

その様子が年相応の少女に戻った様に感じられる。

「言い方が悪かった。直接は教えない。質問くらいは聞くけどな」

そついうと彼女は「なるほど」と納得する。

「さすがにもう遅い。俺は部屋に戻るからな」

飛燕は抜き身だった直剣を鞘に納める。

チンと、響きのいい音が響いた。

「分かった。それでは明日」

「ああ」

飛燕は扉を開けて部屋に入る。

中では杏奈が刀の手入れをしていた。

「お帰り、兄さん。どうだった? 西洋の剣は」

「刀とは一味違うぞ。かなり戦術が広がった」

直剣と刀の二刀流で戦う。  
そんなアンバランスな自分を想像して飛燕は苦笑した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5136s/>

---

侍道4 ~とある兄妹の阿弥浜生活~

2011年12月11日16時47分発行